

第3期宮前区区民会議 第1回（仮称）活力づくり部会 摘録

日 時 平成22年9月7日（火）18：00～20：00

場 所 宮前区役所 保健所1階集団教育ホール

参加者 委 員 山下委員長、直本副委員長、浦野委員、岡田委員、佐藤委員、
田邊委員、豊島委員、藤田委員、恒川副委員長（オブザーバー）

事務局 岩佐企画課長、豊田担当係長、白石職員、鈴木職員
阿部コンサルタント

1 専門部会の流れ、今後のスケジュール

- ※ 山下委員長よりプレ部会の振り返りと今期のテーマの再確認について説明。
- ※ 事務局より「任期2年間の流れ」、「審議テーマ絞込みの過程（振り返り）」の説明。

2 「宮前区らしさ・地域特性を活かしたコミュニティづくり」とは

- ※ 事務局より「宮前区らしさ・地域特性を活かしたコミュニティづくりイメージ」の説明。その後意見交換。

1) 「宮前区らしさ・地域特性を活かしたコミュニティづくり」とは

豊島 子育て支援連絡協議会が主体となり、「うえるかむ宮前」という取り組みを行っており、引っ越してきたご家庭の子どもがいる方が市民館に集まり、民生委員や先輩ママさんと話すことができる。まったく地域と関わりがなかった方が参加し、この場合は素晴らしいと言っていた。そういう人を後押しできるとよい。

Cはしょうがないと思う。AとBを対象にきっかけをつくってあげることが大切ではないか。

事務局 東京と横浜に挟まれた宮前区では、居住者の関心がなかなか地域に向かない。A・B・Cの中でほとんどの人はBのはず。ターゲットとしてA・Bを対象になるべく引き込んでいくことが地域コミュニティづくりのイメージだと思う。地域への参加を促し、それを様々な活動につなげていくイメージで捉えると理解しやすいと思う。

直本 私達が考えなければいけない区民の対象は、地域の担い手になりそうな人を探すというよりは、地域社会と接点を持ち、一歩前に踏み出すという人ではないか。

区 ここでイメージを共有できないと、今後具体的に何をやっていくといっても話がかみ合わないことが考えられるので、ここで共通のイメージがつけられるとよい。

山下 委員のみなさんは既に地域活動をしているが、どういう形でコミュニティづくりに参加したか。

豊島 私は子どもだと思ふ。

山下 保育や小学校の段階からが一番入りやすいだろうか。高齢者の場合、仕事が終わってもいろいろやっている人がいるが、そういった人達はどのような形で入ってきたのか。

恒川 地産地消の部会とも共通で出てきているのは子どもが社会参加のきっかけになっているという意見である。女性は結婚し、子供ができることが社会参加のきっかけになる。男性は会社をやめて、妻に地域に参加してきてほしいと言われて、地域に関わる。自分から積極的に取り組むというより、自然と参加し、面白かったということからつな

第3期宮前区区民会議 第1回（仮称）活力づくり部会 摘録

がっていく。ただし町内会の場合は違い、町内会の方から参加してくれと頼まれる。いろんな活動の中で、町内会や自治会などがいろんな意味でコアになっている。また、意外に町内の活動に関わらず、様々な活動をしている人がいる。こういう人たちとどう接点を持っていくか。

豊島 女性は新住民として環境に順応しやすい。男性の新住民をどうか。

直本 男性の新住民も地域社会に関心はあるはず。きっかけがあれば動くはず。きっかけをどうつかめるかだと思う。

区 何らかの理由があって、地域活動に興味を引かれることがあったはず。そういう活動をしている人がその後、担い手になっていくのではないか。担い手が不足しているのはいろんな団体が②の段階にいる少ない人を奪い合っているからではないか。

藤田 このイメージ図には異論がある。Cは現実には多いが、会社において時間がなかったからである。A・B・Cでいうと、A・Bの方が多くはないか。Cは時間がなく、Cに甘んじている。①、②に時間があれば移行するのではないか。

区 時間がなかったからということであれば、それはCではなくBに該当する。素養はあるのだから。

藤田 ③、④、⑤になるかどうかは個人の問題だと思う。①、②にどう引き込むか。地域社会の底辺は町内会・自治会である。ここに入っていない人がいるが、10%~20%くらいではないか。Cをなんとかするのは難しいのではないか。

恒川 区民祭には20万人が参加する。そのような人が集まるのは何かきっかけがあれば、自分が主体的に動く・動かないは別にして、いろんなものに参加するというではないか。

佐藤 Cは切実なものだと思う。高齢になればなるほど大変。友人で独身が多く、地域との関わりがない人が多い。10年後をステップ1と考えたと、CをA・Bに上げる取り組みをしたい。

直本 最終的にはそこまでいくと思うが、私たちが重心をどこにおいて部会を考えていくか。Cまで入れると、何をしたいのかということが揺らいでしまう。中心となる層がどこになるかを考慮し、活動の重心を考えてく。最終的にはCを含めて関わってほしいという思いはみんな共通に持っている。Bの幅というのは佐藤さんがいうCも含むのではないか。

区 Cというのは、どんなアプローチをしたとしても、まったく地域社会への参加を拒否する人もいる。絶対数としてCはゼロになることはない。

佐藤 A・Bはいろんな団体が今まで取り組んでいるので、うまくいけば連携できる。CをA・Bに上げていきたい。

田邊 55歳過ぎの人たちにアンケートをとったとき、何らかの形で地域社会に溶け込みたいという方が60%以上いた。仕事をしているからそこに入れただけで、今後入りたいという希望を持っている人は多い。特に男性がそうである。こういう人がCに入っているのではないか。Cの人は、大部分は何かのきっかけがあれば、Bに入りたいという要素を持っている。地域社会に入らなくても、自分の趣味を通じてなど、人とのコミュニケーションを他の場で行っている人もいる。それが宮前区の中でできるかどうかは別問題だと思う。前の会社のつながりと地元とのつながりを持っているはずで、高齢者は

第3期宮前区区民会議 第1回（仮称）活力づくり部会 摘録

きっかけがあれば入ってくる。

これから考えていきたいのは若い人である。いかに宮前区という地域の中に入ってきてもらうか。地域活動している佐藤さんや久保さんなどの意見を吸い上げ、区民会議の中で活用していくことを考えたほうがよい。若い人を対象にすることで、転出入が少なくなり、宮前区に定住してもらえるのではないか。

区 A・B・Cの分類に誤解があるのではないか。Cはどんなアプローチをしても興味を引くことが出来ない人たち。22万人の区民全員を地域社会に参加させることは事実上できないので、これはゼロにはならない。Bは、アプローチの題材・手法によっては地域社会に参加する可能性がある人たち。これが大多数を占める。藤田さんの言う「時間がない人たち」や田邊さんの言う高齢者は、Bのどこかにいると考えるとよい。そのような理解で定義している。その誤解があるため、Cを対象にしたいという話になっている。話にあがっている人たちは全てBに入ると捉えてほしい。

豊島 有馬の町内会は8,000世帯あり、そのうち4,000世帯が加入している。未加入者からどうやったら加入できるのかということは聞かれる。その時に何か教えてあげるきっかけがあったらいいと思う。

浦野 そもそも何歳からを若い人というのか。小学生、中学生は親に町内会に連れていかれたり、同級生と遊んだりしているが、高校生になると、区外の高校に行くことになる場合が多く、まちから離れる。20代はいろんなことがやりたくなり、自分が住んでいるまちに目が向かない。30代は自分にとって本当に必要なことが見えてくる。習い事などわざわざ都心に行かなくても、宮前区周辺で気軽に利用できるものがあるということに気付く。仕事の絡みで区民会議に参加し、いろんなことをやっていきたいと思えるようになった。ただし、そうじゃない人は地域に見向きをしないのではなく、意識に入ってきていないだけ。そういう人たちが地域に目が向いたときに、地域に参加するきっかけを子どもや趣味、活動など複数用意できるとよい。そうすれば地域に入っていける。

田邊 宮前区の中でそういう土壌をつくっておくことが必要になる。

浦野 拠点があるということが大事。いつも目にしていれば、これまで行かなかったスーパーでもそのうち利用するというイメージ。

区 宮前区は高校がひとつしかなく、15歳から区外に出て行くことは必至。そういう時期があって、10代後半～20代のいろんな付き合いがある中で、30代に近づくに従って、自分の生活に必要なものが見えてきたり、社会を支える側のことが見えてきたりする。例えば、子どもの頃にお祭りが楽しかったのは、実はそれを裏で支える大人がいたからということに気付く。

浦野 ある一定の年代になったときに地域に目をむけるきっかけとなるものを用意しておけるとよい。自分の歩んできた道を振り返れば、ふと気付くところがあるはず。それを考えていけば自然に出てくるのでは。

恒川 私にとっては、宮前区が終の住み処であることを考えると、地元との接点が必要。そういう意味でのA・Bである。Cは転勤族が該当するのかもしれないと思う。5年前の国勢調査のときの話を聞くと、独身寮にお住まいの人には何回行っても会うことができかったようだ。そういう人がCに入ってくるのか。

佐藤 実家暮らしの独身が私の周りには多い。地域のコミュニティは親が関わり、独身の

第3期宮前区区民会議 第1回（仮称）活力づくり部会 摘録

人はごはんを用意してもらい、寝泊まりするだけ。そういう人たちが多くなるのではないかと思っている。

恒川 気になるのは子どもが結婚して親から離れて暮らしていること。何かあったときにどうするのか。地元への愛着をどうやって気付いていくのか。宮前区らしさをどうやって打ち出していくのかが必要ではないか。

山下 私が会社を退職した頃は地域社会があるかどうかも知らなかった。何らかのきっかけで地域に出てくる人たちを救うための器づくり、きっかけづくりが必要だと思う。

直本 何か形をつくりだそうとすると、無理が生じるのではないか。いろんな取り組みを行い、最終的に、結果的に形になればと考えたほうがよい。無理にひとつの形にしようとする、今まで関心をもたなかった、もしくは関心を持っていてもどうしたらよいか分からない人はなかなか入ってきにくいのではないか。気軽に入ったり、止めたりできるという中で関わりをもち、育っていくのではないか。活力づくり部会はその中間でおおらかに形を捉えていいのかなと思う。①、②をいったり来たりするイメージで、その中で必要があれば③、④につながっていく。あまり堅苦しく決めてしまうと身動きがとれない。

区 楽しい、面白そうというポジティブな気持ちを持つような仕掛けづくりが必要と考えている。楽しいことが地元であれば、目が向きやすい。例えば、最近川崎市で潮干狩りできるという報道があり、多くの方が参加した。きっかけとして、「こんな楽しみ方がある、面白いことがあるよ」という打ち出しをすると目が向きやすいのではないか。

2) 検討内容の切り口

田邊 宮前区の坂の多くに名前がついているので、それを知ってもらう必要がある。単に坂道ということだけでなく、+αとして名前などを知ることによって、坂に興味を持ってもらえる。

山下 宮前区は多摩丘陵の端にあり、その中に平瀬川、有間川、矢上川という3つの川があり、その低地にむかっただけの坂道が多い。「宮前歴史ガイド」の中に、昔から名前がついている坂を38本紹介している。

区 マイナス面を埋めるのではなく、発想を転換し、プラス面として捉え、それを伸ばしていくとマイナス面を感じなくなるというアプローチをしたほうがよいと思う。それが代表例として坂ということであれば、単に歩くだけより、健康づくりという面で捉えると、プラス面として捉えることができ、それを伸ばしていくことで、結果的にトレーニングの一環になっていると捉えられる。

恒川 地産地消と活力づくりはオーバーラップすることが多いと思う。いろんな緑や神社仏閣をいかにうまく組み合わせていくかということが地産地消とオーバーラップしてくる。

藤田 ここでいう宮前区らしさは坂が多いということしか出ていない。他に何があるかを考えなければいけない。

直本 坂を高低差があるものと捉えると、石段もそういえる。他に坂のイメージの中で捉えられるものももっとある。

佐藤 高齢者が多いのは宮前区の特長である。団地が多いためか高齢者が多い。高齢者が

第3期宮前区区民会議 第1回（仮称）活力づくり部会 摘録

多く大変なまちではなく、高齢者が元気で暮らせるまちとして捉えて行く必要があるのではないか。

直本 その代表的なものが坂になるのではないか。

区 坂もあるが、まずは他の切り口も出しあうということではないか。

地域特性を活かすということであれば、地産地消では宮前区にあるもの、産物を幅広く使う。活力づくりでは、地形などまちの特長を活かしていくと捉えるとイメージがしやすいのではないか。まちの特長で考えると、話が出やすいのではないか。

藤田 ヘそがないというのが特長である。それをどうまちづくりに活かせるか。

恒川 ヘそがどういうことかを考えてもいいのではないか。川崎市の7区の中でも宮前区はどんなところと聞かれると答えにくい。地産地消は次回具体的なテーマをひとつずつ考えてきて欲しいというお願いをしている。

直本 地産地消は産物という「動のもの」をいかに活かすか。活力づくりはまちの特徴という「不動のもの」をいかに活かすか。そういう捉え方もできる。坂道だけなのか、坂道や神社、公園等を含め捉えるかなど、どんな風に捉え取り組んでいくかが次の議題になると思う。

藤田 ヘそがない、緑が多い、小さい河川しかない、小さい神社しかないなどどんな特長でやろうかということを考えていかないといけない。

直本 次回はそういうことを土台にしながら、取り上げる切り口について議論したい。

3 その他

※ 次回日程は10月6日（水）18：00から開催する。

※ 部会長は次回決定する。

（以上）